

2年「はっけん くふう おもちゃ作り」

岡崎小学校 栗山 美保

○実践

1学期の野菜の栽培活動で、調べた世話の方法を学級で伝え合いながら意欲的に育て続けることができた。しかし、「工夫する」という点では物足りなさを感じた。そこで、今回は、遊ぶおもちゃ作りを通して、その作り方・遊び方を工夫する力を身に付け、伸ばしたいと考えた。



<おどるへびのおもちゃ>

初めに「紙コップを使ったおもちゃ」を試しに作ることで、おもちゃの作り方・遊び方を工夫できることに気付けるようにした。その後、おもちゃ博士を目指して活動し、どんなおもちゃ博士になりたいか、目標を立てた。次に、学級全員でおどるへびのおもちゃ作りに取り組み、速く回るように個人で追究した。おどるへびのおもちゃの仕組みを生かした遊びをグループで創り出すことができるようにした。友達と関わりながら、より楽しく遊ぶようにおどるへびのおもちゃの作り方・遊び方を考え、発見した工夫を書いた付箋を掲示し、広めた。

○成果

初めに、紙コップを使ったおもちゃを作ったことで、うまく工夫できない自分に気付くことができた。そこから、自分ができるようになりたいことを具体的な目標として考え、この単元の学習の見通しをもった。おどるへびのおもちゃを追究する中で見つけた成功発見と失敗発見を付箋に書いて掲示板に貼るようにしたことで、子供たちは意欲的に試しながら、おもちゃを工夫して作る力を身に付けられた。個人で追究してからグループで遊びを創り出す活動に移したことで、子供たちはおもちゃの特性や面白さを見付け、独創的な遊びを工夫して創り出す力も身に付けられた。

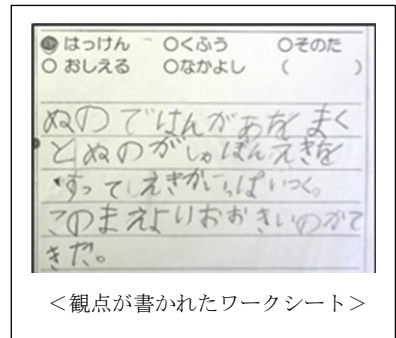


1年「なつとなかよし」

三島小学校 羽根 遡 佑美

○実践

子供たちは日々新しい発見があるにもかかわらず、自らの気づきに無自覚で、活動後の振り返りで気づきを十分に表現しきれていないことが多くあった。そこで、シャボン玉遊びを行い、シャボン玉の面白さ・不思議さに触れる中で、気付いたことを言葉で表現する楽しさを味わわせ、気づきの質を高められるようにしたいと考えた。また、昨年度同じ実践を行ったときに、友達との関わりを多くすることで気づきの質を高められると感じたため、友達との関わりを意図的に設定した。



<観点が書かれたワークシート>

絵本の読み聞かせから始まり、子供たちの思いに沿って単元を進める中で、大きいシャボン玉が作りたいのに、くっつかずに割れてしまう子供がいた。そこで、気づきの質を上げていくために「どうしてすぐ割れちゃうのかな」とクラス全体に問い返した。子供たちからは「液が道具にくっつかないと割れる」「液をしっかりと道具につけないといけない」との意見が出て、液を道具につけることの重要性に気付くことができた。その後も自分の作りたいシャボン玉作りを追究し続けた。

○成果

グループでシャボン玉作りを行い、道具を交換したりコツを教え合ったりすることや、「発見」「工夫」等の観点を設けたワークシートを用意し、自分が伝えたいことを観点から選択して記入することで、気づきを自覚し、言葉で表現することができた。全体での話し合いや一人一人との対話の中で、気づきを価値づけ、自覚化させることができた。自分の作りたいシャボン玉を作るために材料を選んで道具を工夫することができた。それぞれの工夫を見合うことで、友達の気づきと自分の気づきとを結び付けて考え、より質の高い気づきが生まれた。

